



視点

そうか、もう40年になるのか……、 少しは成長したのかな……。

私が助産師人生をスタートさせたのが1986年4月。思い返せばなんと40年！果たしてどこが成長したのか？何かを残すことができているのか？自分自身の成長はいつまで経っても自分では判然とせず、課題ばかりが心にかかる。でもやはり40年と思うと感慨深い。新人時代「妊娠・出産」に関しては曲がりなりにも学習はしてきたものの、産婦人科は必ずしもおめでたい場面ばかりではなく、死産・妊娠中絶・STI（性感染症）・性暴力の結果としての受診、あるいは不妊症や婦人科疾患、それら生々しいたくさんの人間ドラマに遭遇した時、全くお手上げ、どうケアして良いか分からない駆け出し時代の私。分娩介助技術の腕を磨くことが仲間内の関心ごとであったけれど天邪鬼(?)な私はむしろ“産み”以外のケアが気にかかる。「中絶ケアが好きなんて助産師なのに変わっている」とか言われつつもその思いは強くなるばかり。「リプロダクティブヘルス&ライツ」という言葉などまだ知らず、それでも「女性の生き方は本来多様、産む・産まない・産めない、そのどのシーンでもその人生に寄り添うケアを提供するのが助産師の矜持」と、それはもうがむしゃらに手あたり次第に「生と性」に関して本を読み漁り、研究会・ワークショップや学会を梯子。そんな私が見つけたのが「性教協」。夏期セミナーに初参加した熊本大会は大雨で列車が止まる惨事を潜り抜けて到着。発表者として分科会デビューした釧路大会では、バッシングがあるかもと、実は不安と緊張から腹痛を起こし注射薬を持参して登壇した気弱な私だった。そんな私がバックラッシュの頃には本部幹事も体験させて頂いたし、カナダ・ハワイ・欧州ツアー、アジア性教育学会議運営と参加、韓国ツアーと、個人では届かなかったであろうたくさんのシーンに出会わせて頂いた。

入会当時会員は教員の方が目立ち、医療職は珍しくなんとなく居場所を見つけられずにいたが、その頃に現在所属する「全国児童養護施設サークル」を知り仲間に入れて頂いた。実は、自身の育ちの中で家族・親

子問題への葛藤やトラウマを抱えている私にとって児童養護施設サークルはとって“水”が合って既に30年余りのお付き合い、今ではかけがえのない「居場所」である。当サークルでは早くから性虐待・トラウマケアに拘りながら、日々の生活を起点にした生活現場でこそ育める性の学習や支援、「生活の中でのケア」を課題に研究・実践・発信を続けている。背景へのアプローチやアセスメントを大切にしながら、科学的に。皆それぞれの現場を持ち、自分自身の人生を生きながら、こだわりと課題と目標を持ち、活動をしている。気がつけばその研究・実践こそがまさに「包括的性教育」に繋がっていると自負している。

さて、還暦を過ぎてまだ夜勤もしている私はあちこち故障だらけだ。体力だけでなく記憶力・気力・想像力も衰えを感じ、引退を逡巡する日々。

一方、あちこちで「SRHR」という言葉を耳にするようになった。課題山積とはいえ、ようやく我が国でも内服による人工妊娠中絶の認可も成され、緊急避妊ピルのOTC化も始まった。先日知った「わたしの体は“母体”じゃない」訴訟は地裁判決目前。永年のこだわりである人工妊娠中絶ケアについては「V-CAT」という新しいメソッドも出てきた。こうしてリプロダクション周辺ではいくつも大きな動きやうねりが出ている現在、やっぱりもう少し踏ん張って「助産師である私にできる何か」を仲間たちと目指してみようか、と原稿を書きながら自問自答の私である。



鈴木みゆき
(全国児童養護施設サークル 助産師)